

合気道創始者植芝盛平の武術修行過程と武術技法の体系的特性

スポーツ文化研究領域

5006A025-7 工藤龍太

研究指導教員： 志々田文明教授

序章

合気道は世界各地に広がっている日本武道の一つであるが、その実体、特に技法を体系的に説明することは難しい。それは、日本の古流柔術の一派である大東流合気柔術を同流の中興の祖とされる武田惣角(1859-1943)の下で修行し、その他様々な武術修行の結果合気道を創始した植芝盛平(1883-1969)が、合気道の技法を体系的に説明しなかったためである。同じく古流柔術を修行しながら、スペンサーの三育主義に基づく体育的見地から講道館柔道を創始した嘉納治五郎(1860-1943)と対照をなす。

植芝は合気道を教授する際に体系的な説明をせず、弟子たちは様々な解釈で合気道における会派を形成していった。現在、植芝の合気道は様々な語られるが、高弟たちの解釈には個性と多様性を伴い、包括的な理解の解明に至っているとはいえない。平成 19 年9月には武道が中学校における体育で必修化されることが発表された。植芝の合気道の技法的特質が未解明であることは、大いに問題であろう。

本論文の課題は二点である。

A 植芝の武術修行歴を伝記、弟子達の諸言説、関連資料から調査する。

B 植芝の合気道形成期(本論文では 1930 年頃と設定)の武術技法を詳細に記した第1次史料、海軍大将竹下勇(1869-1949)の覚書『乾』、『坤』を用いて当時の植芝の武術技法を明らかにする。

第1章 植芝盛平の武術修行歴

本章では従来合気道において定説とされてきた植芝の武術修行歴について、植芝の伝記を定説に、弟子達の言説、その他諸資料から、再考察を試みた。項目毎にまとめると、図-1 の通りになる。

図-1 植芝盛平武術修行一覧

武術名	師	修行期間
相生流柔術	不明	明治 35 年春、18 歳で上京するまでの間に修行した可能性がある
天神真楊流柔術	戸沢徳三郎または戸張滝三郎	明治 35 年春、上京してから同年 10 月まで
起倒流柔術	不明	天神真楊流と同時期、或いは別の時期か
柳生新陰流剣術	不明	天神真楊流と同時期
柳生心眼流柔術	中井正勝、坪井政之輔	明治 36 年から4年間
講道館柔道	高木喜代市の可能性は低い	明治 39 年から明治 45 年3月 29 日までの期間
大東流合気柔術	武田惣角	大正 4 年から昭和 6 年 4

		月7日までは武田との交流が確認された
柳生新陰流剣術	武田惣角	武田惣角に師事した期間
宝蔵院流槍術	軍隊時代の銃剣術の教官、または武田惣角	柳生心眼流を修行した期間、または武田惣角に師事している期間

諸史料を検討した結果、合気道形成期の植芝の武術技法は大東流合気柔術を中心としていたことが明らかになった。

第2章 植芝盛平の武術技法の体系的特性

海軍大将竹下勇は合気道普及の立役者といえる人物であり、植芝の武術を熱心に修行した人物であった。彼が植芝の武術技法を記した覚書『乾』、『坤』の価値は極めて大きい。『乾』、『坤』は執筆時期、内容から上下巻と考えられる。

本論文では確認できた『乾』収録の武術技法 1625 手は、56 の格闘形態を想定し、その7割が相手に柔道や相撲のように組み付かれた場合を想定していた。『坤』には武術技法 1095 手を確認でき、その6割強が組み付かれた格闘形態を想定していた。また、『坤』には武器の操作や武器に対する技法が 343 手確認された。その他、多人数取りなど、今日の合気道の演武にも見られる技法が存在した。また、柔道に対処する技法も見られ、植芝の研究熱心な態度が窺われるものであった。

両覚書に収載された総ての技法を格闘形態別に分類すると図-2 のようになる。

図-2

	組んだ格闘形態	離隔の格闘形態	その他	合計
『乾』	1137	487	1	1625
『坤』	729	366	0	1095
合計	1866(69%)	853(31%)	1(0.04%)	2720

結章

課題A、Bについて検討した結果、以下のことが結論された。

課題A. 植芝の修行歴の定説に対して。

- 天神真楊流の師は戸沢か戸張の可能性がある。
- 起倒流の師は不明である。
- 高木は植芝に柔道を指導していなかったと考えられる。
- 武田の大東流合気柔術は植芝の武術技法に大きな影響を与えた。

e. 武田が植芝に渡した柳生新陰流の免状は本物であるか疑わしい。f. 植芝の槍術技法は軍隊の銃剣術、または武田の指導した宝蔵院流槍術か大東流の槍術であると考えられる。

課題B。

- a. 「組んだ格闘形態」が総技数の約 70%を占めた。
- b. 大東流の技法を中心としていながらも、それ以外の武術の影響が見られた。
- c. 体格、力などに対応できる多様性をもっていた。
- d. 実戦的な当身を多く用い

た。e. 投げ技には柔道でいう「崩し」と考えられるものも見られた。

先行文献と『乾』、『坤』を用いた以上の研究で、植芝の合気道形成期の武術技法は「組み」を中心に「離隔」の格闘形態も包含した総合的な技法を持つことが明らかになった。